

第IV部門

大大阪時代の道頓堀

大阪工業大学大学院 学生員 ○福田 明文

大阪工業大学工学部 正会員 吉川 眞

大阪工業大学工学部 正会員 田中 一成

1. はじめに

道頓堀は江戸時代に舟運や利水のために開削された。その後、堀の南側に芝居小屋が移され、道頓堀の街づくりが始まったとされる。江戸期以来、歌舞伎や浄瑠璃が興行され演劇の街として栄えてきた。大正時代には、カフェや洋食などの近代建築も立ち並び、モダンで華やかな大大阪であった。この大正時代では第一次都市計画事業で、道路の拡幅と橋梁の架け換えも行われている。

一方、水都と称されてきた大阪は、高度経済成長の過程で、堀川の埋め立てが行われるなど、そのイメージを変容させてきた。しかし、道頓堀は今も水都を象徴する堀川である。また、「食い倒れ」と「巨大看板」が道頓堀のイメージともなっているが、これらは演劇に付随する形で成長したものである。演劇の街というイメージは大正時代に比べると影を潜め劇場が閉鎖や移設されたものもあるが、角座や松竹座など貴重な歴史が今も継承されている。さらに近年では、商業施設の中に、大正時代の街並みを再現するなど、かつての賑わいを取り戻そうとする動きも見られる。このように、今も昔も大阪の象徴である道頓堀の歴史の変遷を把握することで、大阪の都市変容を把握できるとともに、人々の大阪への関心を高めることができると考えている。

2. 研究の目的と方法

本研究では、GIS（地理情報システム）を用いて散在している史料などを集積し、対象地である道頓堀の歴史の変遷を把握することを目的としている。さらに、この過程で得られる知見や資料が、人々の大阪への関心を高め、新たな歴史的資料として役立つことを目指している。具体的な方法として、収集した古地図、旧版地図、地籍地図などを現代空間上に定位し、そこから得られる情報や都市構造要素を GIS アプリケーションを用いて読み解いている。その結果から道頓堀の歴史の変遷把握や地域の特性の抽出を試みている。

3. 対象地域の概要

研究対象地である道頓堀は、大阪市中央区に位置している（図－1）。その歴史は、豊臣秀頼によって開削が命じられ、安井道頓とその弟である道卜らが私財を投じて建設したことから始まったとされる。開削が終わると、家屋などの建設が行われ、1626 年には勘四郎町（現在の南船場周辺）、通称芝居町から芝居小屋が道頓堀の南側に移設された。これが、道頓堀の演劇の幕開けとなった。そして、浪花座・中座・角座・朝日座・弁天座の劇場は、道頓堀五座と呼ばれ、演劇を楽しむ人々で賑わっていた。このように道頓堀は、これらの五座を中心とし、それらに付随して芝居小屋などの飲食街が発達し、現在も言わずと知れた歓楽街である。しかし、大阪市第一次都市計画事業など、高度経済成長の過程において、道頓堀五座などの劇場もいくつか姿を消してしましたが、現在でもよき伝統が継承されている。



図－1 対象地域

4. データベースの構築

道頓堀の江戸時代から現代に至るまでの都市構造の歴史的変遷を把握するにあたって、収集した古地図や旧版地図をスキャニングし、GIS アプリケーションである SIS (Spatial Information System) を用いて、読み込み、GCP を参照して幾何補正を行った。その後、街区や河川などをトレースしデータベースを構築した。構築した時代は、元禄 16 年 (図-2)・天保 14 年・明治 20 年代・明治 40 年代・昭和 20 年代・昭和 40 年代・現在 (図-3) において変遷の把握を行った。



図-2 元禄 16 年の道頓堀街区



図-3 現在の道頓堀街区

5. 地価マップ

人が集まる場所は必然的に地価が高くなることに着目して、大大阪時代の道頓堀においてどこが華やかで賑わっていたのか把握、比較するために地価マップを作成した。地価マップ作成には、1911 年 (明治 44 年) の「地籍台帳・地籍地図 [大阪]」を使用した。この台帳には、町丁名・面積・地価・所有者の住所など、さまざまな情報が記載されている。その出版背景は市街地の急激な膨張に伴って地価が高騰し、土地売買が盛んに行われたため、その権利者を示す地籍地図・台帳が必要となったからである。明治 44 年の地価については、地価の面積の単位が坪であり貨幣価値も異なるため、銀行の初任給を参考にして現代の貨幣価値に換算し、千円/㎡の単位で地価マップの作成を行った (図-4)。また、現代の地価マップにおいては、個人情報に関係もあり、路線価を用いて作成した (図-5)。地価マップをみることによって、道頓堀の中でも賑やかであった歓楽街を抽出することができた。明治 44 年の地価は道頓堀五座が並んでいた道頓堀川の南側で地価が高くなっており、やはり五座を中心とする演劇の街であったことが把握できた。しかし現在では、御堂筋の開通によって沿線の地価が高くなり、道頓堀川の北側の宗右衛門町においても高い値を示している。さらに詳細にみると、大正時代では大変珍しい 24 時間営業をしていたカフェ・パウリスタは、現在では別の商業施設になっているが、現在に至るまで地価が高いことが把握できた。

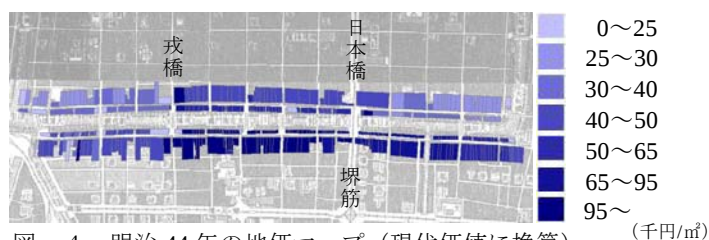


図-4 明治 44 年の地価マップ (現代価値に換算)

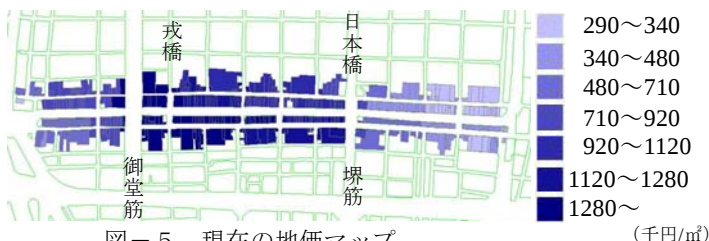


図-5 現在の地価マップ

6. おわりに

幾何補正を行い、都市構成要素である街区などのデータベースを構築したことにより、道頓堀周辺の街区や道路の拡幅などの現在に至るまでの都市形成過程の一端を把握することができた。また、地価マップ作成によって地価の移り変わりも把握することができた。すなわち、人々が道頓堀のどこに集客され、賑わっていたのかを地価マップで示すこともできたと考えられる。これらのことから、歴史的変遷を把握し、過去の道頓堀を知ることによって、人々の都市への関心を高められたと考えられる。

今後の課題としては、昭和時代の地価マップや他地域との比較も必要であると同時に、大正時代における道頓堀の街路空間を CAD/CG を用いて 3 次元化することも重要であると考えている。

【参考文献】 宮本又郎：地籍台帳・地籍地図 [大阪]，柏書房，2006